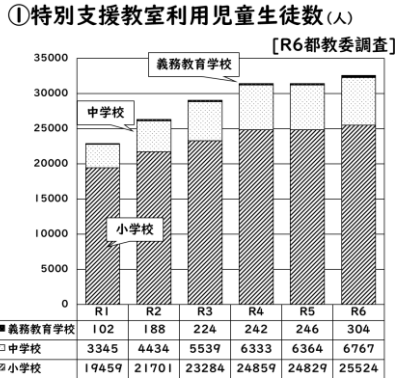


都情研実態調査結果の概要

今年度は Google フォームに変更することで回答途中の保存を可能にし、二部あったアンケートを一つにまとめて行いました。回収率は、小学校特別支援教室が約八六%、中学校特別支援教室が約六七%、小学校自閉症・情緒障害特別支援学級が約六二%、中学校自閉症・情緒障害特別支援学級が約四六%でした。ご協力いただき、ありがとうございます。以降、紙幅の関係で、小教室、中教室、小学級、中学級と省略いたします。

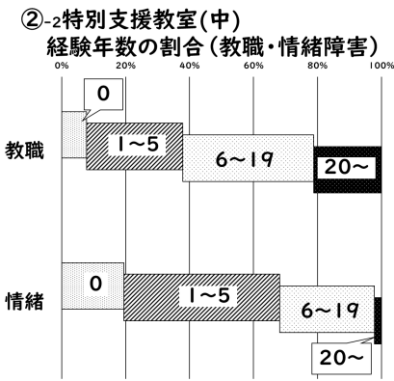
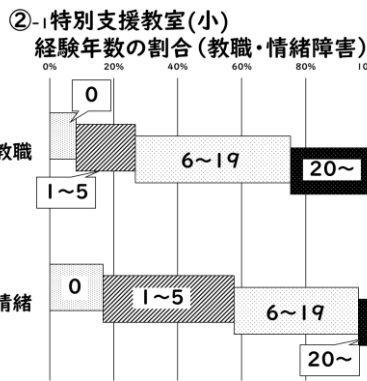
① 特別支援教室利用児童生徒数

都教委による令和六年度の調査です。令和四・五年は横ばいでしたが、再び増加したことが分かります。



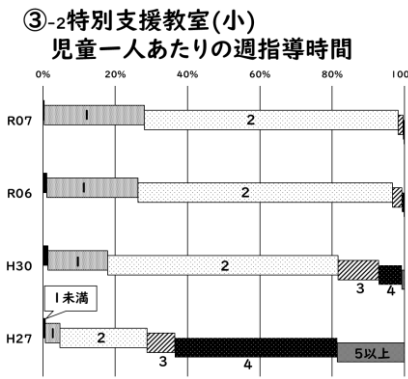
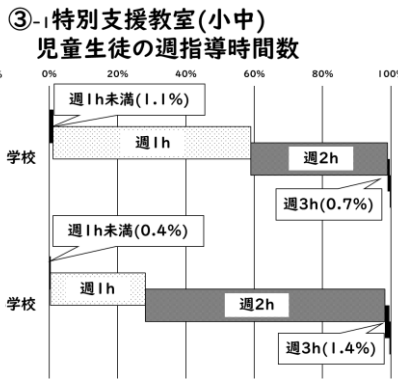
② 教職・情緒の経験年数

小教室では初任者の割合が微増、それに伴い情緒未経験が微増しています。中教室では教職・情緒経験ともに六年未満が小教室の割合よりも高い傾向は変わりませんが、昨年度比較では微減しています。



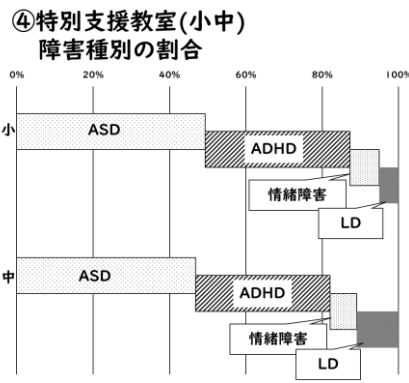
③ 週指導時間数(小・中)

小教室の七割の児童が週二時間の個別指導と小集団指導の対し、中教室では約六割が週一時間の個別指導です。一方、経年では小教室でも週一時間の児童が徐々に増えてきている傾向が見られます。次期学習指導要領では、「各教科の指導」とともに、「通級による指導の授業時間数の上限」について見直しが図られています。東京都の特別支援教室体制にどう影響していくのか気になるところです。



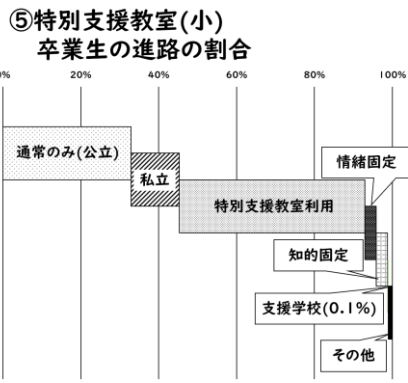
④ 児童生徒の主障害

小・中ともに例年と比率は大きく変わりません。中教室では、小教室よりも学習障害傾向の割合が増えるという特徴があります。また、認知発達の遅れが疑われる割合が約五%あります。

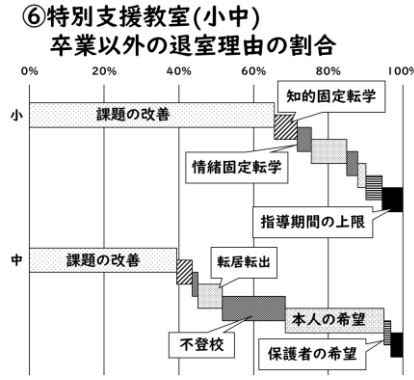


⑤ 卒業生の進路(小)

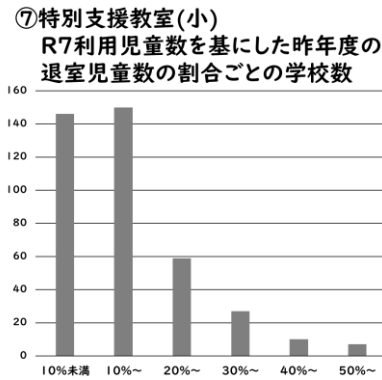
例年の比率と大きく差はありません。中教室の継続利用と情緒固定への入級が微増しています。



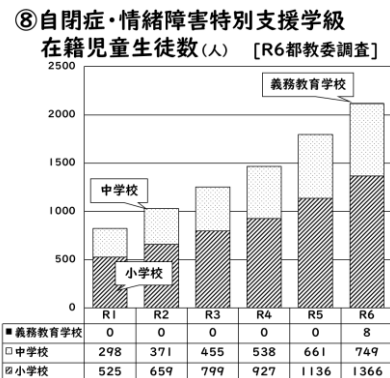
⑥ 卒業以外の退室理由(小・中)
 小中ともに「課題の改善」が最も多いものの、中教室では「本人の希望」「不登校」が次いで多く、小教室では「本人の希望」「不登校」が少ないという特徴があります。



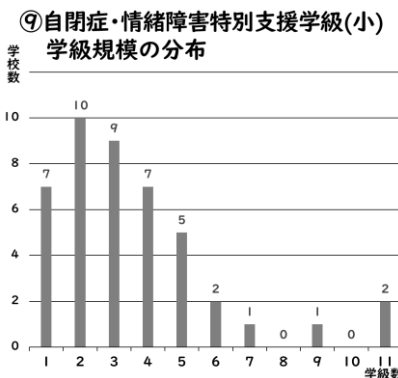
⑦ 退室の割合(小)
 今年度の利用児童数を基にした昨年度の利用終了の割合は、二割未満が半数を占めます。一方、五割以上の学校もあり、自治体の方針によっても割合に差がありました。



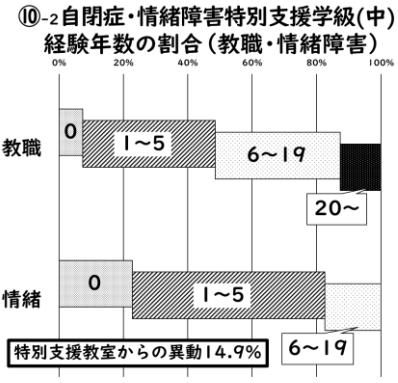
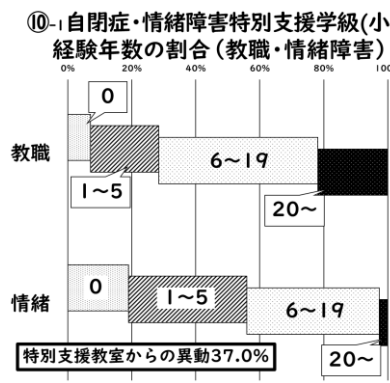
⑧ 自閉症・情緒障害特別支援学級在籍児童生徒数
 ここからは学級に関する項目です。都教委による令和六年度の調査です。新たに設置する自治体・学校があるため増加を続けています。義務教育学校にも初めて設置されたことが分かります。



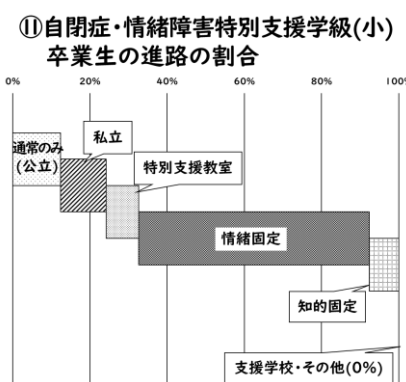
⑨ 学級規模の分布(小)
 自治体の方針が大きく影響しており、それにより学級集団の特性も大きく変わります。専門性を高めていくためにも、ガイドラインを示す必要も考えられます。



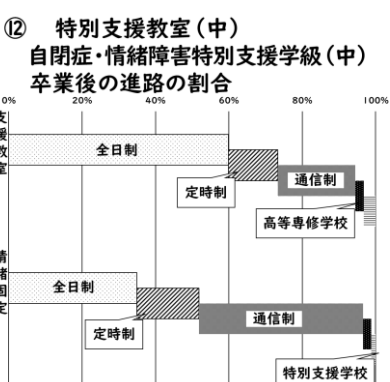
⑩ 教職・情緒の経験年数
 昨年度同様、教職経験年数としては六年以上が半数以上を占めるものの、情緒経験では六年未満が半数を超える状況が見られます。中学級は情緒経験6年以上の割合が微増しましたが、未だに6年未満が8割を超えます。小中を比較すると教室から学級への異動する割合に差があることも影響していると考えられます。



⑪ 卒業生の進路(小)
 中学級と私立への進学が増加しています。



⑫ 卒業生の進路(中)
 中教室と中学級の進路先の比較です。昨年度同様、中教室では全日制への進学が多い一方、中学級は通信制への進学が多いという特徴があります。



これからも都情実態調査へのご協力を、何卒よろしくお願いたします。

「発達障害のある児童・生徒に必要な指導・支援について考える」 ～ 将来を見据えて、今、何をすべきなのか ～

神戸大学名誉教授

鳥居 深雪 先生

講演は、ASDの理解と支援を求める力の育成について、分かりやすくお話ししていただきました。紙面に限りがあるため、お話のかなりの部分を割愛せざるを得ず、誠に残念です。それでも、とても示唆に富む内容ですので、最後までお読みいただき、今後の指導に生かしていただければと願っています。

(広報担当)

一 通級指導を受ける児童・生徒
私はこれまで二十年以上にわたり、発達障害のある子どもたちと関わってきました。小学校勤務を経てNPO法人を設立し、卒業後も支援を続ける中で痛感しているのは、学校教育の枠だけでは彼らのニーズを満たしきれないという現実です。

学齢期を終えれば自立できると考えられがちですが、実際には生

活面や進路に関わる困難は継続し、適切な支援がなければ孤立や不適応を招くことも少なくありません。特に「普通」にこだわる社会的な価値観は、本人の特性を否定的に捉えさせ、生きづらさを深める要因となつていきます。どこかで私たちが、普通が良いという刷り込みをしていかなかったのか、それが今自身の宿題となつていきます。

二 特別支援教育の現状と課題

通常の学級に在籍している特別な支援が必要な児童生徒は、8.8%という2022年の報告があります。実感はもつと多いというのが現場の先生のご感覚です。小中学校で8.8%ですが、小学校一年生は12%となり、割合が高いです。私たちのグループで就学前の「気になる子」を調査しました。

就学前なので学力の問題は入りません。そうすると就学前が8.9%です。小中学校で8.8%と言わ

れていた中の行動面で困難がある子供は4.7%です。年齢が低いほど割合が高い。だから、実感としては、一割あるいは地域によってはもつと多いということになります。

通級指導を受ける児童生徒は、2023年度に20万3376人です。小学生が16万人を超え、中学生は3万人台、高校生が2000人台です。高校生の数は、自治体によってかなりの差があります。この報告の時点で一割が兵庫の高校生です。

通級指導を受ける児童生徒の数は右肩上がりです。通級による指導を受ける発達障害の子供たちは、小学校、中学校、高等学校と上がつて、少し様相が変わってきます。高等学校の割合は少し地域による偏りがあり、自閉スペクトラム症と情緒障害でも半数を超えるという実態があります。発達段階によって問題となつている発達課題の違いがあると考えられます。幼児期では、身辺自立や行動、小学校では行動に目が向きます。しかし、段々と学力の問題も出てきます。中学校になると、行動、学力、社会性となります。中学校では、進学・高校入試の問題があるので、学力の問題が重要になります。

学力の問題がある子供は、低年齢のうちの方が多く、調査では年齢が上がると減っていきます。実

際は学年が上がるほど、学習の問題、学力の問題が大きくなってきます。授業内容が理解できないという生徒の数はどんどん増えていきます。そこが中学校では大きな課題になります。

高等学校になると、むしろ学力はそれほどでもありません。入試を経るので、大体近いぐらいの学力の生徒たちが同じ学校にいるからです。むしろ、社会進出が目前に迫ることで、社会性の問題が大きくなります。だから、社会自立に向けて社会性の課題が大きくなるのです。

行動上の問題があると、学校教育の間、見過ごされることはありませんが、行動上の問題として外在化しない、静かに座っている、迷惑をかけないタイプの自閉スペクトラム症の子供たちが育ち損ねて、高等学校で初めていろいろ学びができるというケースが結構あります。

兵庫の高校通級ではそのような子供たちをサポートして、社会に送り出すということを行っています。自閉スペクトラム症の問題は社会性の課題で、行動上の問題として顕在化するかどうかに関わらず、自立に向けて社会性の問題に取り組むことが重要です。

三 発達障害の理解と支援の基本視点

ASDの理解については、不適

応の状態があつたり、非常に大きな困難がある場合に障害の診断が必要になります。「特性があること＝障害」ではありません。この発達障害については、診断や判断やイメージの混乱が非常に多いです。

例えば、人当たりの良いASDの子と言つたら、「人当たりの良いASDの方がいるんですか」と言われます。一般的な理解とはそのような状況です。高機能で知的障害がないASDというイメージを、必ずしも理解している訳ではありません。知的障害のないASDの認識があまりないので、高機能で知的障害がないASDの子たちが不適応を起こすことで、私のような専門機関に繋がります。そのような子どもたちが、まずASDが基本にあるという理解がされることで、ずいぶん周りの関わりが変わってきます。

行動上の問題として表面化すると、必ずどこかでサポートに繋がります。ASDの子供だと、集団にうまく参加できない、ルールを守れない、パニックを起こす、癩癩を起こすということがあり、大體繋がってきます。一方で、行動化しないタイプのASDの子供がなかなか繋がりにくい、気付かれにくいということがあります。私が勤務している支援センターで、幼児の段階で行動化しない、知的障害のないASDの子どもが何人も来ています。乳幼児の時期から

サポートをスタートでき、子供の理解を保護者と共有できたら、どれだけその成長が期待できるかということを実感しています。しかし、行動化しないタイプの子たちは、気付かれにくいということがあります。ASDの基本の症状は、社会性の困難、コミュニケーションです。それから、狭い興味・関心、いわゆるこだわりというもの、感覚の問題も関係します。また、変化に弱い、つまり切り替えが悪いということが入っています。そして、人当たりの良いASDの子は理解されないということがあります。

学習の困難SLD（限局性学習症）などもあります。読み書き算数や発達性協調運動症、極端な不器用、これについては気付かれにくいので、そのまま単に勉強ができない子という扱いをされています。

DCD（発達性協調運動症）の子供もかなり不登校の中にいます。特にDCDは、不器用さがあるため、目立つところで失敗をします。例えば、体育で跳び箱が跳べない、縄跳びが跳べない、鉄棒ができないなどです。毛筆書道で、うまく字が書けない、紙を汚しまくる、これも目立ちます。音楽だったら、リコーダーの穴がきちんと押さえられないので変な音が出てしまいます。そして、周りから低い評価を受けて自己肯定感が下がります。

だから、不登校の中にDCDの子供たちも混じっているのです。障害について気付かれにくいからです。SLDやDCDの子どもたちは不登校という形で課題が現れやすいということになります。

ただ、これらは今、ADHDとASDの併存が多いです。SLDとASDは、併存が多いことで診断の混乱が多いです。発達段階によっても見え方が変わります。成長に伴って表に出てくる問題の様相が変わってきます。それもあって幼児期の確定診断は非常に難しいです。だから、診断名は情報の一つで、むしろ大事なのは子供の状態像です。発達のニーズを優先するべきで、診断は一つの情報と考える必要があります。

知的水準が知的障害レベルか、境界知能レベルか、平均レベルか、平均以上かによって状態像はかなり異なります。それもASDの問題、あるいは発達障害の問題が見えづらくなっていることの理由の一つです。

社会的コミュニケーションと対人的相互反応の障害という問題もあります。例えば一人ですつと話しているが会話のキャッチボールができない、質問に対して答えないうようなことがあります。また、行動、興味及び活動の限定されたパターンの繰り返しがあったり、変化に弱かったり、感覚の問題を多くの子供たちがもって

います。そこで、ASDの子供によく見られる極端な偏食はベースに感覚の問題があると考えるべきです。こだわりで食べないという子もいますが、無理やり食べさせないことが基本です。そして、感覚の問題については原則配慮が必要で、慣らすのが良いだろうと、無理にやらせることは迫害体験になります。感覚の問題は、ずっと同じではなく、成長に伴ってかなりマイルドになります。特に安心できる環境にいと、かなり和らぎます。安心できない環境にいと、感覚の問題が敏感になります。安心できる環境にいと年々穏やかになり、以前は苦痛だったものが大丈夫になることがあります。極端な偏食については、何かをきっかけに紛れて大丈夫になることもあります。だから、無理に食べさせないというのは基本となります。

四 進路と自己理解の重要性

ASDの子には、同年齢の子との関係づくりが難しく、異年齢の子と遊ぶ姿がよく見られます。そうすると、中学校や高校の先生が、小さい子と遊んでいるから、職業として保育士を勧めてしまうことがあります。しかし、これは間違いです。なぜかという点、小さい子と遊ぶということと、保育士や幼稚園教諭として幼児の生活に責任をもつということとは、全く質

が違うからです。また、保護者との関係づくりや同僚との信頼関係をつくらなければならぬということとは難しいです。同世代と関係がつかれないとなると、保護者や同僚との関係づくりで苦労します。むしろ、ASDの人だったら、対人援助の職業よりも、IT関係等で活躍している人が多いです。研究職等も多いです。そのような本人の得意なもので活躍できる職を選択する方が、本人も幸せで周りも上手いききます。

人によって困難の現れ方は多様です。知的に高いと、学校に通っている間は良い成績を取り、学力が高いので問題にされません。学力が高いから大学生活は大丈夫と成りてしましますが、就職活動や単位取得で苦労しています。

社会性については、学力が高いと見逃されて、成長してから「大人の発達障害」として明らかにになります。私の友人も就職までは上手いききましたが、プランニングができない、見通しが立てられないということ、部下として指示を出してもらっている時は完璧でしたが、管理職になった時にとっても大変だということが明らかにありました。成長してから明らかになるということがあります。

不適応の状態があるときに、障害の診断を必要とする人がいます。しかし、特性に合った仕事を選べば長所になります。そう考えると、

診断はいろいろな、必要ないということになります。

五 ソーシャルモチベーション

ASDの基本的な理解として、ソーシャルモチベーションという理論があります。人間の子供は発達早期から人間に興味があります。物よりも人に注意が向きます。人との関わり自体がモチベーションになるのです。例えば、「抱っこ、抱っこ」と抱っこしてほしくてせがみます。これが、そのモチベーションです。「見て、見て」と言っ

て何かを見て欲しくて、持つてきます。子供たちは、このようなこともモチベーションになります。しかし、ASDの人たちは、ソーシャルモチベーションが極端に低いということがあります。だから、「抱っこして」と言わないなど、小さい頃、保護者さんが育てやすかったというのは、ソーシャルモチベーションが低く、あまり親に求めてきたり、せがんだりしなかったというタイプの子供で、小さい頃、手がかからなかったと

なるのです。人見知りも後追いもなかったというような子供は、まさにこのソーシャルモチベーションが低いASDの子供たちです。一方で、小さい頃、すごく手がかかって大変だった子供は、感覚過敏があり、小さい頃大変だったというエピソードが出てきます。ASDの子供の幼少期は、両極端です。

手がかからなかった、すごく手がかかって大変だった、そのどちらが多いです。そのソーシャルモチベーション（人に対する興味、関心が低い）ということがベースにあるというのが、この理論です。解決するためには、人へのモチベーションが低い子供たちのモチベーションを高くしてもらいたいです。嫌がることを無理やりして

いたら、人というのは嫌なものだという経験をします。モチベーションは下がることはあっても、上がることはありません。しかし、例えば子供が遊んでいるところに大人が関わり、もつと面白くなつたら、人が入ったらこんなに楽しくなるという経験になります。そうすると、人に興味をもつようになります。

モチベーションを高めるような関わりをしている時に、誤解があります。幼児期は大人が力づくで言うことを聞かせられるので、そんなに甘やかして良いのかという意見が必ずきます。今、子供のモチベーションを高めるための関わりを行っています。何で子供の言いなりになっているんだと思う人もいます。でも、ソーシャルモチベーションを高くすることで、この子たちの社会性の発達を支えられるということ。関係ができてくると私の顔を見るようになります、そこで模倣も始まり、次の成長に繋がります。だから、手っ取

り早く言い聞かせるということは、決して子供にとつての学びにならないということ。す。

個別の指導計画で、長期目標や短期目標に「指示に従えるようになる」と記載している場合がありますが、指示に従うというのは大人の都合です。しかし、例えば同じことを目指しているとしても、「指示が理解できるようになる」ならば子供の学びの視点となりません。だから子供の視点、学びとしてどう考えていけるかが、とても大事です。子供視点で考えていく子供の学びをどう支えるかと考えていけると、子供たちの成長につながるアプローチになります。

六 ニューロダイバーシティ

Neurodiversity(ニューロダイバーシティ)という考えがあります。自閉スペクトラムの知的水準は、知的障害を伴っている人からギフテッド、非常に知的に高い人まで多様です。この知的水準の高いASDの人は、専門領域で活躍している人が少なくないです。そのように活躍している人達には、障害という表現が馴染みません。困難がないからです。その場合に障害という言葉ではなく、ダイバーシティ・多様性と表現されます。ASDのDをディスオーダーではなく、ダイバーシティのDとするべきだという声があります。実際、科学的な分野で知的に高いASD

の脳に関してです。

例えばMRIを撮った時に明らかな気質的な問題がありません。むしろ情報処理をどうしているかという一般的でないやり方（非定型）でニューロダイバーシティ、この多様性という考え方が、最近かなり広がってきています。この脳の多様性がある人をニューロダイバージェントとも言います。

ニューロダイバーシティ、ニューロダイバーシティの人たちは、どこまでが個性で、どこからが障害ですかということがあります。これは、当人の状態で線が引けるのではなく、適応状態が良ければ個性、適応状態が悪くて、福祉サービスや支援が必要な状態であれば、障害という診断が必要になります。ここで関わってくるのが環境です。置かれている環境によって適応状態は異なります。当事者の自己理解と進路選択が重要になってきます。

「逃げる」ということと「選ぶ」とは違います。苦手なことから逃げるのではなく、自分の得意なことを生かすことに切り替えて欲しいです。小さい頃からの刷り込みが大きいとASDの人は、変化が難しいです。小さい頃に一回入ってしまうと、それがずっと鮮明に残ります。だから、私たちは気を付けていかないといけないです。ソーシャルスキルトレーニングは、取り扱いに注意が必要です。

小学校で行うSSTは小学生のソーシャルスキルですということを本人に分かるように伝えなければいけません。本人に伝えなければ、小学校の頃にやったSSTのまま大きくなってもしてしまいます。そうすると通用する訳がないので、「こうやったらうまくいくよ」ではなく、「まあ、うまくいくかもね」ぐらいです。そのあたりが絶対であるかのように言わないというのも、ASDの人と関わる上でとても大事です。

教えることはとても大事ですが、年齢によって変わります。高校生のSSTは、面接の受け方と職場に必要な報連相とを行っています。友達を遊びに誘うスキルは高校生に合わないと思います。どんなに正しいスキルを行っても、相手が「イエス」と言うとは限りません。嫌だったら「ノー」と言い、相手を選びます。小学校高学年から相手を選びます。どんなに正しい誘い方をしても、あなたとは遊びたくないと思ったら、「嫌です」と返事が返ってくるので、そういうことも考えることが必要です。

「自己理解」と「進路選択」が重要です。ここでいう「自己理解」は障害受容ということではなく、自分は何が得意で何が苦手で、どんなことを手伝ってもらったら上手いのかと自分のことを分けることです。自分に合う進路を選び、活躍している人たちもたく

さんいます。環境によって長所にも困難にもなります。

子供と関わる時の「多様な学び」や「指導のスタイル」がある中で、情報処理のスタイルとして「継時処理」と「同時処理」があります。継時処理は順を追って説明する教え方ですが、継時処理が苦手で、同時処理、直感的に図など用いて全体を捉える方が分かりやすいという子がいます。例えば、説明も結論から先に言ってくれる方が分かりやすいというパターンです。順番に聞いていこううちに、注意がそれたり、最初に何を言っていたか分からなくなったりするタイプの子たちは、同時処理的なアプローチの方が分かりやすいです。

七 教育現場の課題と合理的配慮

日本の教育の一斉指導は曲がり角にきています。通級指導が必要な子供が増えているということは、一斉指導も限界にきているということだと思います。そして、一斉指導でこぼれてしまう子供たちには処理速度の問題があります。時間がかかるとため一斉指導だと打ち切られ、時間さえあればできるのに、こぼれてしまうのです。一斉指導の中で、どんどんこぼれていくので、本人は自己肯定感が下がっていきません。僕は頭が悪いからという子でも、「きちんとできたでしょ」「時間が必要ただけだよ」「時間があればできるんだよ」と言うだけでも、

子供の自尊心は変わっていきます。また、視覚優位と聴覚優位、聞く方が分かる人と見る方が分かる人がいます。また、記憶の種類として、面白かった、悔しかったなど、情動、感情が動くエピソードになり、エピソード記憶の方が残る人もいます。子供たちが勉強するときに、楽しく学ぶ方が良いというのはそのような意味もあります。「面白かった」というと、エピソード記憶になります。機械的に覚えることは抜けやすいです。視覚情報のもう一つの特徴として「消えない」ということもあります。字幕として残っているのに、すぐにピンと来なくても後で追えるということもあります。視覚情報を提示するときにフラッシュカードなどにしてしまうと意味がない時があります。そこに情報として残っていることが有効です。ASDの人にとっては情報処理の仕方が違うという考え方もあります。急いでいないように見えますが、体の情報処理が独特なので時間がかかっているという時もあります。ワーキングメモリが必要な情報の一時的な保持に関係があります。必要がなくなったら消さないといけません。いつまでも覚えていて新しいことが入らないからです。ASDの子たちの中には、記憶がとても鮮明に入ってしまう、消すのが苦手という人がいます。それも彼らにとっては強みになる時も

ありますが、すごく困難になる時もあります。だから、小さな頃に苦手なことから逃げてはいけないということが、ずっと鮮明に入っていることもあります。「上書きがなかなかできない」「鮮明に残りやすい」というのも一つのASDの人の記憶の特徴です。絶対であるかのように言わないでおくというのは大事なことです。

実行機能(計画プランニング)の問題もあります。ASDの人はプランニングが苦手です。だからスケジュール表を示します。スケジュール表が絶対ではありませんが、必要なら使い、必要なくなればやめるということもあります。見通しをもちにくい児童・生徒にスケジュールを示すことで、うまくやれることが増えます。

板書を書き写すのが苦手な例として、タブレットで写真を撮り、ノートをとったことにさせてもらうという合理的配慮があります。しかし、「本校では認めない」「写真を撮っても良いがノート点はあげられない」「撮った写真を家で全部書き写して来るように言われた」ということがあります。それでは配慮になりません。時代に合せて柔軟に切り替えていかないといいません。そして、切り替えが悪いというよりは取り掛かりが悪いとしてやる気がないと思われるケースもあります。それから「抑制」の問題です。

余計な情報や反応を抑えるということが抑制ですが、ASDのこだわりは抑制の問題だという先生もいます。多様な学びの場があり、今、学びの場を柔軟に変更できません。自由とその子が一番伸びる場所を選べるということです。特別支援教育を薦める時に、通常の授業についていけないからという勧め方はしないでください。授業についていけないからというペナルティになります。特別支援が必要なものも保護者もそう言われるとシャッターを降ろす人も多いです。足りないのは子供の能力ではなく教育の厚さです。通常の授業だと厚さが足りないが、丁寧な指導をしたら絶対この子は伸びるというような説明をすると、比較的領いてくださる保護者が多いです。その時の子供さんが一番学べる場所を自由に選ぶことができます。

最近では、大学卒・大学院卒という人も増え、障害者雇用というものもあります。事務職は高学歴の障害者枠がありますが、理系の大学院では研究や専門職でそのような枠がないと言っています。今年度から新たに始めた企業があり、就職した人もいます。障害者差別解消法が改正されて、民間事業者も合理的配慮が義務になった影響が出てきています。障害のある人が世の中に出てからの状況というのも、大きく変わってきています。

八 ソーシャルモチベーションの実践

ASDの子供への支援というところで、ソーシャルモチベーションはとっても重要です。人に対する興味関心をもてるように、良い関係を経験し、この良好な関係性を基盤とした支援というのが有効だということも研究レベルで報告されています。

有名なプログラムとして、アリースタートデンバーモデル(ESDM)があります。これは生後48カ月までが最も重要だというプログラムです。また別の近い考え方に、JASPER(ジャスパール)というものもあります。ジャスパールはUCILAの先生たちが中心になつたもので、共同注意に焦点を当てています。こちらは小学生ぐらいまで有効なプログラムとして紹介されていますが、いずれもこの良好な関係性というのが大事、これを基盤として支援をしていくというのが基本です。そして、良い育ちをした子どもたちがたくさんいるという報告がされています。応用行動分析については、ABAも行動に焦点を当てている考え方はありますが、そこにモチベーションが加わったものもあります。世界的に有名なところで、ツリーハウスでは、応用行動分析の機能分析の中に、モチベーションを多く入れていました。子供自身

のモチベーションを大事にするというのを基本に据えた応用行動分析です。そのスペシャリストのASDの子供たちは、とても人が好きで感じよく接してくれました。

九 子供たちに必要な力

助けを求める力を育てるということで、社会に出るにあたっての一番の切り札・オールマイティーは助けを求める力です。だから「子供に何もかも自分でやりなさい」という教育はしない。「必要なところで助けを求めること」を教えてください。その前提として、障害者差別解消法の合理的配慮の提供に際しては、本人からの意思の表明というのが前提です。これは自己決定権の尊重です。よって、先回りして整えるというのは、ある意味、本人にとっては失礼な場合があります。求めているものを提供することは良いわけではないので、当事者の意思を尊重するということです。サポートのレベルもいろいろで、合理的配慮の手前である日常レベルのサポート(ナチュラルサポート)でかなりうまくいくこともあります。その時に大事なことが、きちんと感謝の言葉を伝えるようにするということです。「ごめんなさい」という指導をよくしますが、「ありがとう」を言える人に育ててください。そして、何でもやってもらうではなく、自

分ができることで相手に貢献する。そして、自分の権利も相手の権利も尊重する。相手にも権利があるということを引きちんと考える必要がありませう。

セルフアドボカシーという言葉があります。「自己権利擁護」でもともとそういう意味ですが、自分を守る力と言っても良いです。

私たちのモデルとしては、知ることと、自己理解と援助要請力です。知るといのは、別格です。知らないものは使えないからです。どんな権利があるのか、どんな地域資源があるのか知るといことは、そもそも自分の権利を守る上での大前提です。自分で「知る」ということが、能動的にできる子供たちにしなければいけないのです。生成AIも使えるようにしたい、その上で自己理解と援助要請力が重要で、自己理解は障害受容ということではありません。自分に何ができてどんな強みがあるのか、そしてどんなサポートがあったら上手くいくのかというのが分かることが自己理解であり、その援助を求める力というのが必要です。

自己理解については、自分のセルフポイント、できること、得意なこと、具体的な気付いていく、そしてなりたい自分のイメージがもてるモチベーションになります。相談する相手を選ぶということもあります。ソーシャルサークル

ルです。

知的に高いASDに危惧されるのが、過剰適応とカモフラージュの問題です。本当の自分を全く出さない、出せない、本当の自分が自分でないかのように振る舞いすぎると、どこかで息切れしてダウンしますというのが、カモフラージュとか過剰適応の問題です。

兵庫の高校通級の3つの柱で、先ほどの知ることと、アカデミックスキル、ソーシャルスキル、アドボカシースキルの頭文字を取ってKASAと言っています。ここで言うアカデミックスキルは授業の補習ではありません。高校教育は、授業の補習は教科担任でやっている、通常の教育課程以外の、社会に出たときに必要な読み書き計算を、高校通級で扱います。ソーシャルスキルも年齢によって変わります。高校生の通級だと、小中学校で学び損ねたことのカバーもあるので、当事者に聞いたところ、「パーソナルスペース」というのを学べたことが、すごく良かった」と言っていました。

兵庫県の高校通級生徒向けリーフレットは、生徒の視点で書かれており、いろいろ生徒のエピソードも紹介しています。失敗する権利を奪わないことです。何にも失敗しないように整えすぎると、自己理解ができないのです。困っていない、必要ないとなってしまうように、ちよつ

とした失敗、学ぶことにつながる失敗は必要です。整えすぎると自分の困難に気付かないからです。だからバランスの良い特別支援をしていく必要があります。「多様性」ということは、環境や成長によって長所にも障害にもなります。全ての子供の権利を尊重して「多様な学びを保障する」「自分を守る力としてセルフアドボカシー」が重要です。何でもやってあげてしまつと、自分で伝えるということ

ができなくなりませう。だから、「児童自身が考える」「児童自身が求める」「児童も考える」ということを、ぜひ小学校時代から育ててください。最終目標はその人らしい成長・人生ということだす。

！・・・・・・・・・・・・・・・・！！

第十回夏季研究大会を終えて

企画運営本部総務 上山雅久

(立川市立第八小学校)

令和七年八月一日(金)に小平市ルネこだいら大ホールにおいて、「発達障害のある児童・生徒に必要な指導・支援について考える」将来を見据えて、今、何をすべきなのか」を研修主題として、第十回夏季研究大会(多摩北ブロック大会)を開催しました。今年度は、大会記念講演を神戸大学名誉教授 鳥居深雪先生にお願いしました。ご講演のテーマは、「ASD等の児童・生徒の自己理解と援助

要請力」で、セルフアドボカシーという言葉が印象に残りました。また、午後の実践発表の講評では、私たちの大先輩である長谷川安佐子先生にお世話になりました。長谷川先生には、ブロック研修会にも毎年お呼び立てし、お世話になりっぱなしです。

以前、夏の研修会と言えば夏合宿の形式で、事例や指導実践を持ち寄っていました。会の規模が大きくなり、夏季研究大会という形をとるようになって早くも十年が経ちました。感慨深いものがあります。

大会当日は、天候やJR武蔵野線のトラブルなどありましたが、計一三一名の参加で、会場はほぼ満席となりました。ご協力いただいた鳥居先生や長谷川先生、小平市教育委員会の方々、実践発表の先生方、運営に当たられた多摩北ブロックの先生方に、深く感謝申し上げます。

編集後記

広報に関するご意見、ご感想は左記までお寄せください。

編集・発行 企画運営本部広報担当

各ブロック 広報係

世田谷区立船橋希望中学校

(小峰 秀律)

☎03・3484・3743

都情研ホームページでも閲覧できます。

